基礎・基本の定着と活用力向上のために

平成30年度全国学力・学習状況調査

本県の結果と今後の対策

【小学校】

平成３０年１０月２５日

青森県教育庁学校教育課

平成３０年度全国学力・学習状況調査
本県の結果と今後の対策【小学校】

目　　次

Ⅰ　国語Ａ「主として知識に関する問題」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
１　科目全体の結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
２　分類・区分別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
３　設問（小問）別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
４　国語Ａに関する調査と質問紙調査との相関　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

Ⅱ　国語Ｂ「主として活用に関する問題」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
１　科目全体の結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
２　分類・区分別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
３　設問（小問）別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
４　国語Ｂに関する調査と質問紙調査との相関　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７

＜平成２９年度県学習状況調査を踏まえて（国語）＞　・・・・・・・・・・・・・・・・８

Ⅲ　算数Ａ「主として知識に関する問題」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
１　科目全体の結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
２　分類・区分別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
３　設問（小問）別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
４　算数Ａに関する調査と質問紙調査との相関　・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

Ⅳ　算数Ｂ「主として活用に関する問題」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
１　科目全体の結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
２　分類・区分別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
３　設問（小問）別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
４　算数Ｂに関する調査と質問紙調査との相関　・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

＜平成２９年度県学習状況調査を踏まえて（算数）＞　・・・・・・・・・・・・・・・１９

Ⅴ　理科・・・２０
１　科目全体の結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
２　分類・区分別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
３　設問（小問）別の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１
４　理科に関する調査と質問紙調査との相関　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

＜平成２９年度県学習状況調査を踏まえて（理科）＞　・・・・・・・・・・・・・・・２５

Ⅵ　質問紙調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
１　児童質問紙調査の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
２　学校質問紙調査の結果と今後の対策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９

【本報告書の活用に当たって】

本報告書は、本調査の結果を受けて、本県の学習指導上の課題を明らかにし、県内の各学校が今後とるべき対策の参考となる事柄を示すことを主なねらいとして作成したものである。

また、本報告書の活用に当たっては、各教科・科目の結果だけでなく、質問紙調査の結果についても、自校の結果と比較しながら、今後の指導の改善に役立てていただきたい。

なお、本調査の結果の概要や正答数の分布、すべての小問の正答率等については、文部科学省から配布された『平成３０年度全国学力・学習状況調査【小学校】又は【中学校】調査結果』（ＣＤ－ＲＯＭ版）を参照していただきたい。

さらに、国立教育政策研究所のホームページに、文部科学省の報告書や調査結果を踏まえた「授業アイデア例」がアップされているので、併せて活用していただきたい。

【本報告書の用語や記号等について】

本報告書中の用語や記号等については、次のような意味で使用している。

「**全国比**」
:「今年度の本県の平均正答（回答）率－今年度の全国の平均正答（回答）率」の式で求めた値。本県が全国を上回っていれば「＋」、また、下回っていれば「－」で表示している。

「**前年度県比**」
:「今年度の本県の回答率－平成２９年度の本県の正答（回答）率」の式で求めた値。今年度が平成２９年度を上回っていれば「＋」、また、下回っていれば「－」で表示している。

「□」: 概況を示す。

「▼」: 課題を示す。

「◆」: 今後の方向性や対策・指導等を示す。

「**数字**」: 本県の正答（回答）率が、対比している値に対して５ポイント以上下回っていることを示す。

平成３０年度全国学力・学習状況調査
本県の結果と今後の対策
【小学校】

Ⅰ　国語Ａ「主として知識に関する問題」

１　科目全体の結果

国語Ａ全体の平均正答率（%）		
青森県	全国との差	前年度における全国との差
７５	＋４	＋４

□　国語Ａ全体としては、本県は、全国をやや上回っている。
◆　引き続き、基礎的・基本的な知識や技能の確実な定着に努めるため、以下に示す学習内容の改善・充実に努めて指導する。

学習内容の改善・充実
１　語彙指導の改善・充実
２　情報の扱い方に関する指導の改善・充実
３　学習過程の明確化、「考えの形成」の重視
４　我が国の言語文化に関する指導の改善・充実
５　漢字指導の改善・充実
（小学校学習指導要領（平成２９年告示）解説　国語編）

日常の国語の授業で大事にしたいこと
○発達の段階に応じて、日常生活に必要とされる日記、記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動を行う場面を意図的に設定する。
○話合い活動等の言語活動の場においては、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりする活動をさせる。
○体験的に理解させたり、繰り返し学習をさせたりするなど、発達の段階に応じて読み・書きなどの基礎的・基本的な能力を確実に身に付けさせる。
○国語科の授業に学校図書館等を計画的に活用する読書活動を取り入れ、目的や意図に応じた効果的な読み方を継続的に指導する。

２　分類・区分別の結果と今後の対策

分　類	区　分	平均正答率（%）		
		青森県	全国との差	前年度における全国との差
学習指導要領の領域	話すこと・聞くこと	９０．６	－０．２	＋１．２
	書くこと	７４．７	＋０．９	＋２．０
	読むこと	７５．４	＋１．４	＋１．８
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	７２．３	＋５．３	＋４．５
評価の観点	話す・聞く能力	９０．６	－０．２	＋１．２
	書く能力	７４．７	＋０．９	＋２．０
	読む能力	７５．４	＋１．４	＋１．８
	言語についての知識・理解・技能	７２．３	＋５．３	＋４．５

□　学習指導要領の領域別では、「話すこと・聞くこと」・「書くこと」・「読むこと」では、全国と同程度であり、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、全国を上回っている。
▼　基礎的・基本的な知識や技能の定着は概ね良好ではあるが、引き続き継続して確実な定着を図っていく必要がある。

▼　学習指導要領の領域別では「話すこと・聞くこと」・「書くこと」・「読むこと」を、今後さらに伸ばす必要がある。

◆　「話す・聞く能力」を伸ばすには、例えば次のような指導の充実を図る。

「話す・聞く能力」を伸ばすための指導の充実

〇相手の意図を捉えながら聞くために大切なこと
- 自分に伝えたいことは何か、共に考えたいことは何かなど、話の内容を十分に聞き取るよう指導することが大切である。

〇相手と自分の意見を比べて考えを述べるために大切なこと
- どこが共通するのか、どのような点が違うのかなどを、具体的に明示しながらまとめて話すことができるように指導することが大切である。

〇公開討論の形式などのような話合いで大切なこと
- 話し手だけではなく聞き手も話題について十分に調べ、自分の考えを形成して話合いに臨むことができるような指導が大切である。

◆　「書く能力」を伸ばすには、例えば次のような指導の充実を図る。

「書く能力」を伸ばすための指導の充実

〇構成の効果を考えて、物語を創作する指導の充実
- 物語を創作する際には、読者が展開に期待をもって読むことができる構成を考えて書くことが大切である。
- 効果的な構成を工夫するためには、これまでに読んできた物語を構成という観点で読み返し、それぞれの特徴とその効果を整理するなど、読むことの学習との関連を図ることが有効である。
- 構成を工夫することのよさや大切さを自覚し、自身の作品に生かしていくことができるように指導することが大切である。

〇目的や意図に応じ、複数の資料から適切な内容を取り上げて、詳しく書く指導の充実
- 自分の考えたことや伝えたいことが相手に十分に伝わるように書くためには、複数の資料から情報を得て、詳しく書くことが必要となる場合がある。その際、得られた情報の中から目的や意図に応じて適切な内容を選択したり、関係付けて捉えたりすることが大切になる。
- 情報の何をどのように取り上げて、詳しく書けば効果的であるかを整理して書くことができるように指導することが大切である。

◆　「読む能力」を伸ばすには、例えば次のような指導の充実を図る。

「読む能力」を伸ばすための指導の充実

〇目的に応じて、複数の本や文章などを選んで読む指導の充実
- 目的に応じて、複数の本や文章を読み重ねたり、読み比べたりするなど、効果的な読み方を選択して活用することは重要である。
- 伝記には様々なものがあり、同じ人物の伝記であっても、複数の本を選んで読むことで、取り上げられた人物の生き方や人生などをより深く知ることができるということについて指導することが大切である。
- 人物の生き方や考え方、その偉業を意味付けるという点から、同じ本の中でも、事実の記述や説明の表現が一つではなく複数用いられていることが多い。それらを結び付けながら読む指導も大切である。

（『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校国語】』Ｐ．９）

３　設問（小問）別の結果と今後の対策

（１）正答率の低い問題（正答率が概ね６５％以下の小問。）

問題番号	問　題　の　概　要	平均正答率（%）	
		青森県	全国との差
5	つながりが合っていない文を選択し、正しく書き直す。（主語と述語の関係）	４３．８	＋８．３
7	□に入る内容の組合せとして適切なものを選択する。（正しい敬語の組合せ）	５６．６	＋０．６
８オ	文の中で漢字を正しく使う。（せっ極的）	５８．８	＋７．４

①概況及び課題

□　各小問ともに、全国と同程度か、上回っている。また、無解答の割合は、全国平均３．５％に対し、１．１％と低く、問題に答えようとする意欲や時間内に最後の問題まで到達している児童の割合が高い。

▼　小問５については、全国を上回ってはいるものの正答率が５割に満たなかった。主語と述語の関係を適切に捉えることができず、主語と述語のつながりが合っていないものとして選ぶことができなかった。主語と述語が適切な係り受けの関係になっていることが、伝えたいことを相手に正確に伝える上で重要であることに気付かせ、その使い方を理解させる必要がある。

▼　小問７については、相手や場面に応じて適切に敬語を使うことができなかった。敬語を使う際には相手と自分との関係やその場の状況を意識して、適切に使うことが必要である。

▼　小問８オについては、正答率が全国比を上回っているが、５割をやや上回る程度であり、課題が見られる。へんやつくりの組立や漢字の成り立ち、文や文章の中で正しく使うことができるようにする必要がある。

②今後の対策・指導

◆　主語と述語は、文の骨格をなすものであり、明確な文を書く上で最も基礎となるものである。主語と述語との照応関係が大切であることについて、文章を読んだり表現したりするときに強く意識できるように指導する必要がある。具体的には、児童が自ら主語と述語が照応していないことに気付き、正しく書く必要性を実感できるよう、他者に向けて話したり、目的や相手を明確にした実用的な文章を書いたりする指導が考えられる。また、主語と述語との関係については、表現する時だけでなく、文章を読む時にも強く意識できるように指導することが大切である。また、書くことの学習とも関連させ、児童が自分で書いた文や文章を、主語と述語との関係に注意しながら、丁寧に読み返していく習慣を付けることが大切である。

「主語と述語の関係」を捉えさせるための指導の充実

○主語と述語の関係

①だれが（何が/何は）　どうする　　例：私は、しなかった。
②だれが（何が/何は）　どんなだ　　例：反省点は、多い。
③だれが（何が/何は）　何だ　　例：反省点は、しなかったことだ。

※小問５について、主語と述語の関係を捉えにくくしているのは、主語が人ではなく「反省点は」になっているところである。そして、述語に当たる部分が「用具の手入れをあまりしませんでした」と動作を表す表現になっているため、主語と述語を適切に照応させるには、「こと」などを補う必要がある。

・日常の指導では、説明的な文章のみならず、文学的な教材での指導においても主語と述語の関係を理解させ、内容を捉える必要がある。また、主語と述語が書かれた数枚のカードを使い、その組合せを選択させたり、自分が書いた文章を使い、主語と述語の関係を捉えさせたりする指導が必要である。

・主語と述語の関係だけでなく、修飾と被修飾との関係や「だれが」「いつ」、「なにを」

「どのように」、「なぜ」など、文の構成について理解することができるよう学習活動を工夫することが大切である。

（『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校国語】』Ｐ．９、３９）

◆　高学年は、敬語の役割や必要性を自覚してくる時期であるため、相手や場面に応じて適切な敬語を使うことに慣れるようにすることが重要である。日常生活の具体的な場面と関連させ、いつ、どのようなときに、誰に対してどのような敬語を使うことが適切であるかを考えるなど、児童が自覚的に敬語を使用することができるような指導が大切である。

相手や場面に応じて適切に敬語を使う指導の充実

〇敬語を使う際には、相手と自分との関係、その場の状況などを意識し、適切に使うことが求められる。

・地域の人や保護者などと関わる学校行事などにおいて話したり、案内の手紙を書いたりする。

・敬語を使う相手については、状況により、自分や身内に関わる行動などについては、尊敬語を用いることが適切ではないというような、公の場における言葉の使い方に対する感覚を養うことが大切である。

（『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校国語】』Ｐ．９、３９）

４　国語Ａに関する調査と質問紙調査との相関

（１）児童質問紙調査との相関

□　質問番号（１４）「学校の授業時間以外に普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）。」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	３時間以上	７６．１		７８．７
2	２時間以上、３時間より少ない	７７．２		
3	１時間以上、２時間より少ない	７６．６	15.4ポイント	22.9ポイント
4	３０分以上、１時間より少ない	７１．０		
5	３０分より少ない	６３．０		
6	全くしない	６１．８		５５．８

◆　家庭学習の時間が１時間以上の児童の平均正答率が高いことから、家庭学習の時間が一定時間以上確保している場合は、基礎的な学力の定着に結びつくと言える。しかし、３時間以上の正答率がやや下がることから、家庭学習を効率よく行えるよう習慣化を図っていく必要がある。

□　質問番号（５５）「５年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「当てはまる」	７８．９		７６．３
2	「どちらかといえば、当てはまる」	７４．３	18.1ポイント	18.0ポイント
3	「どちらかといえば、当てはまらない」	６８．８		
4	「当てはまらない」	６０．８		５８．３

◆　課題解決に向け、進んで考え、取り組んでいたとする児童の平均正答率は約８割であることから、基礎的・基本的な内容の知識・理解の定着を図るため、主体的に課題解決に取り組むよう授業の充実・改善を図る。

（２）　学校質問紙調査との相関

□　質問番号（１３）「調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「そのとおりだと思う」	７７．８	13.3ポイント	７４．０
2	「どちらかといえば、そう思う」	７５．１		11.7ポイント
3	「どちらかといえば、そう思わない」	６７．０		
4	「そう思わない」	６４．５		６２．３

◆　授業中の課題解決に主体的に取り組む学年の正答率が高いことから、授業の課題を把握させ、課題解決のための授業を工夫することで、意欲をもって学習に取り組み、学習内容の理解につながる。

Ⅱ　国語Ｂ「主として活用に関する問題」

１　科目全体の結果

国語Ｂ全体の平均正答率（%）		
青森県	全国との差	前年度における全国との差
５７	＋２	＋２

□　国語Ｂ全体として、本県は、全国をやや上回っている。

◆　基礎的・基本的な知識や技能を活用して課題を追求する力の更なる向上に努めるため、今後も、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域において、次のような授業を行う。

知識や技能を活用して課題を追究する国語の能力を伸ばすために

○問題解決的な学習過程で、授業を展開する。
○授業の導入では、学習意欲を喚起する問題（課題）を設定する。
○児童が自力（一人）で問題（課題）解決に取り組む時間を確保する。
○児童同士が、互いの考えを発表し合う時間を確保する。
○児童が、自分の考えや学習のまとめを自力で書くように指導する。
○単元の中に計画的に言語活動を位置付ける。
○学習の振り返りを学習活動に合わせて、個別・グループ・全体などで行う。

２　分類・区分別の結果と今後の対策

分　類	区　分	平均正答率（%）		
		青森県	全国との差	前年度における全国との差
学習指導要領の領域	話すこと・聞くこと	６５．１	＋０．５	＋１．９
	書くこと	４８．６	＋３．０	＋２．９
	読むこと	５５．９	＋５．１	＋２．４
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項			
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	３６．９	＋３．７	＋４．５
	話す・聞く能力	６５．１	＋０．５	＋１．９
	書く能力	４８．６	＋３．０	＋２．９
	読む能力	５５．９	＋５．１	＋２．４
	言語についての知識・理解・技能			

□　学習指導要領の領域別では、「読むこと」において、全国を上回っており、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」において、全国と同程度かやや上回っている。
□　評価の観点別では、「読む能力」において、全国を上回っており、「国語への関心・意欲・態度」、「話す・聞く能力」、「書く能力」及び「読む能力」において、全国と同程度か、やや上回っている。
▼　領域別では「話すこと・聞くこと」、観点別では「話す・聞く能力」の平均正答率が他の領域、観点と比較すると低いことから、今後、これを伸ばす必要がある。
◆　「話す・聞く能力」を伸ばすためには、目的や意図に応じて話合いの機会を設け、各教科等との関連を図りながら、具体的に指導する。その中で、話し手の発言をよく聞き、中心を捉え、分類・整理することなどを指導していくよう、以下のような指導を行う。

「話す・聞く能力」を伸ばすために～話し合うことを通しての指導事例～
〇学校生活の中で、計画的に話合いの機会を設け、話し合うことに慣れさせる。
・朝の会や帰りの会、学級活動の話合い、各教科のグループ活動、自主的な話合い等の場面で話合いの機会を設けることが考えられる。
・初期の段階では、必要に応じて話型を活用するなど、具体的に指導する。
〇相手や場に応じ、適切な内容や言葉遣いなどで話すようにさせる。
〇発言内容をよく聞き、考えの中心となることを捉えさせる。
・話の要点を聞き取り、大事なことを短い言葉でメモをとる習慣を身に付けさせる。
・発言内容を自分の言葉に置き換えて理解させるなどの工夫をする。
・発言内容が分からない時には、聞き返しや質問をして確認するようにさせる。
〇複数の発言内容を聞き分け、考えの立場や見解などを分類・整理させ、話合いの観点を明らかにさせていく。
・キーワード、共通点、相違点等に着目させる。
〇話合いを観点に沿って振り返り、整理する。
・個人の振り返り、学級での振り返り
・話合いの様子を動画に撮り、その動画を示しながらの振り返りの活動

（『平成２６年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校国語】』Ｐ．５１、『平成２６年度全国学力・状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例【小学校国語】』Ｐ．９～１０、『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校国語】』Ｐ．５７、『平成３０年度全国学力・状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例【小学校国語】』Ｐ．４）

３　設問（小問）別の結果と今後の対策

（１）正答率の低い問題（正答率が概ね５５％以下の小問。）

問題番号	問　題　の　概　要	平均正答率（%）	
		青森県	全国との差
１三	言葉をどのように使っていきたいかについて、話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる。	３４．７	＋０．９
２二	むし歯を防ぐ効果について、「保健室の先生の話から分かったこと」を取り入れて「おすすめする文章」を書く。	１４．８	＋１．３
３一	どのようなことが知りたくて【自伝「旅人」の一部】を読んだのか、その説明として適切なものを選択する。	５０．６	＋１．２

①概況及び課題
□　上記３問は、全国平均正答率が１０％台から５０％台と低い問題であり、うち２問は記述式の問題である。
▼　１三では、話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめることに課題がある。

▼　２二では、目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書くことに課題がある。
▼　３一では、目的に応じて、複数の本や文章などを選んで読むことに課題がある。

②今後の対策・指導

◆　自分の考えをまとめる際には、相手の意見と自分の意見との共通点や相違点を整理することなどが大切である。相手の意見を聞いて考えたことや、共感したり納得したりした内容や事例を取り上げるなどして、自分の考えを筋道立ててまとめることができるように指導を工夫することが大切である。

◆　推薦理由を明確に伝えるためには、事例を挙げて具体的に説明することが有効である。事例を挙げて書く際には、自分の考えを具体化したり、相手の理解を促したりすることができるかどうかを判断したり、必要な資料を集め、得た情報を適切に関係付けて書いたりすることが大切である。

◆　学年が進むにつれ、本を中心とした資料から、新聞、雑誌、インターネットなど、情報収集の範囲やその活用方法が広がっていくため、目的に応じて適切な本や資料を選んだり、効果的な読み方をしたりすることの指導が必要である。

話し手の意図を捉え自分の考えをまとめる力を付けるには～話し合う学習を通して～

〇自分の意見と比べながら、友達の意見を整理する。
- ・比べて考えたことを整理する際には、児童の実態に応じ、それぞれの発言を言葉や記号などのメモとして書き残す。
- ・話し手の「〇〇に賛成です・反対です」、「〇〇に付け加えて」、「例えば〇〇」などのキーワードに着目して聞く習慣を身に付けさせる。
- ・交流の場を設定し、各自の考えがどのように共通していたり相違していたりするのかなどを明らかにする。また、一人一人が目的をもって交流することにより、自分の考えを広めたり深めたりすることにつながっていくということを児童自身が実感できるよう、指導することが大切である。

目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして書く力を付けるために

〇児童の興味関心に応じた題材を設定したり、目的や相手を明確にしたりすることで、児童が主体的に取り組むように工夫する。

目的に応じて、複数の本や文章などを選んで読むことの指導

〇児童一人一人が、興味・関心や読書経験に応じて選書することができるような読書環境を整えておくことが大切である。
- ・課題解決のために、複数の本や資料を比べて読むときには、どのような情報が必要なのかを明確にし、効果的な読み方を選択できるようにする指導が大切である。

＜効果的な読み方の例＞
- ・目次や見出しなどを活用して読む
- ・自分に必要な情報を別の言葉に置き換えて探しながら読む
- ・段落ごとに必要な情報と結びつくような言葉を見付けながら拾い読みをする。

（『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校国語】』Ｐ６５、７４～７５）

４　国語Ｂに関する調査と質問紙調査との相関

（１）　児童質問紙調査との相関

□　質問番号（２１）「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか。」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	当てはまる	６１．１	16.5ポイント	６０．３
2	どちらかといえば、当てはまる	５８．６		16.7ポイント
3	どちらかといえば、当てはまらない	５２．７		
4	当てはまらない	４４．６		４３．６

◆　地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある児童の正答率が高いことから、国語科で培った語彙力や表現力等を生かし、学校で学んでいることが社会とつながっていることに気付かせるような指導をする。

□　質問番号（３７）「今回の算数の問題について、言葉や数、式を使って、わけや求め方などを書く問題がありましたが、どのように解答しましたか。」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した。	６１．３	36.3ポイント	６０．４
2	書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中で諦めたりしたものがあった。	４３．６		32.5ポイント
3	書く問題は、全く解答しなかった。	２５．０		２７．９

◆　国語科で培った言語能力が、他教科の言語活動等に効果的に働き、国語科のみならず、他教科における記述式の正答率が高まるため、発達段階に応じた系統的な指導を行う。

（２）　学校質問紙調査との相関

□　質問番号（６５）「調査対象学年の児童に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、調べたり文章を書いたりしてくる宿題を与えましたか。」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「よく行った」	５７．８	4.8ポイント	５５．９
2	「どちらかといえば、行った」	５６．７		6.5ポイント
3	「あまり行っていない」	５３．０		
4	「全く行っていない」	０		４９．４

◆　家庭学習として、調べたり文章を書いたりしてくる宿題を与えることで、正答率が高い傾向が見られることから、学校での学習と関連させながら、調べたり書いたりすることを家庭学習として取り入れることで、児童の活用力の向上につなげることができる。

＜平成２９年度県学習状況調査を踏まえて（国語Ａ・Ｂ）＞

【話すこと・聞くこと】

平成２９年度県学習状況調査実施報告書では、「大事なことを聞き落とさないようにしながら、話の中心に気を付けて聞いたり、話し手の意図を捉えながら聞いたりする力」の向上が挙げられた。このことを踏まえ、改善すべき点として、学級での話合いや集会活動での話題など、様々な場面で何を話しているのかを正確に聞き取ることができるような機会を設定し、大事なことを聞き落とさないようにするとともに、話し手の意図を考えながら聞きとるための聞き方について、継続した指導をすることが大切であるとし、５・６年生では、話し手の意図と自分の意見とを比べるなどして、考えをまとめることが大切であるとした。

平成３０年度全国学力・学習状況調査国語Ａの「話すこと・聞くこと」は、全国比－０．２ポイントと同程度であった。「話すこと・聞くこと」において、話し方・聞き方の具体的なポイント等について、今後も引き続き段階的、系統的な指導を行うとともに、他領域とも関連性をもたせながらの指導が必要である。

【書くこと】

平成２９年度県学習状況調査実施報告書では、資料から読み取った内容と記述において、必要な情報収集と条件についての適合が十分とは言えないとし、「複数の資料を読み取り、それらを関連付け、条件に合わせて書く力」の向上が挙げられ、必要な資料の収集、読み取り、関連付け、全体を通して考えたことを新聞やポスター、文章等で表現する等の力を育成することが大切であるとした。また、他教科等の学習や生活に関連付けながら、明確な目的意識や相手

意識をもたせた課題を設定した授業を行うことが大切であるとした。
平成３０年度全国・学力・学習状況調査では、Ａ及びＢ問題の「書くこと」の領域の６問全てにおいて同程度から上回る結果であった。「書くこと」において、今後も引き続き明確な目的意識をもたせた取材、記述をする指導をしていくことや、身近なことから必要感のある課題を設定し、課題から条件を導き出す授業を行うようにしたい。

【読むこと】

平成２９年度県学習状況調査実施報告書では、説明的な文章については、目的や必要に応じて文章の要点を捉えながら読み、文章を引用したり要約したりすることが十分とは言えないとし、「目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりする力」の向上が挙げられた。今後の指導においては、児童自身の目的意識や必要感を十分に喚起しつつ、文章の大体を捉えさせ、文と文の関係や段落相互の関係に注目して情報を見つけさせたり、目的に応じて要約させたりすることが大切であるとした。
また、文学的な文章を読むことにおいては、人物像において、自分の考えの形成が十分とは言えないとし、「複数の叙述を基に登場人物の人物像を捉える力」の向上が挙げられた。このことを踏まえ、改善すべき点として、各場面に複数ある登場人物の行動や会話などを関連付けながら、それぞれの登場人物の特徴や性格を押さえて読む学習が大切であるとした。
平成３０年度全国学力・学習状況調査では、国語Ａ・Ｂの「読むこと」は４問出題され、同程度から上回る結果となった。今後も登場人物の心情や性格、考え方などを多面的に捉えるために、学習のねらいにあった学習形態の工夫や、指導計画の工夫、作品全体から関連付けた読みの指導等を行うことにより、読むことについて着実に定着していくものと思われる。

【活用】

国語科における活用に関する問題についての状況は、長文や複数の資料等、情報量が多くなった場合の情報の取捨選択や解釈、熟考することについては課題が残る。今後は、長文や複数の資料を使った指導においては、目的に応じて、大まかに読んだり詳しく読んだりする等、軽重をつけた情報の取り出しをさせる授業を行うようにしたい。また、学校図書館を計画的に活用し、その機能の活用を図り、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動の充実に向けた取組を実践したい。

Ⅲ　算数Ａ「主として知識に関する問題」

１　科目全体の結果

算数Ａ全体の平均正答率（%）		
青森県	全国との差	前年度における全国との差
６５	＋１	＋１

□　算数Ａ全体としては、本県は、全国と同程度である。
□　本県と全国との差は、前年度と大きな変化はない。
□　本県と最上位県の平均正答率６８％との差は、－３ポイントである。
◆　引き続き、基礎的・基本的な知識や技能の確実な定着に努める。

基礎的・基本的な知識や技能の確実な定着のために
○身に付けた知識や技能を使って解決する場面を繰り返し設定する。
○解決の過程や結果を振り返る場面を設定する。

２　分類・区分別の結果と今後の対策

分　類	区　分	平均正答率（%）		
		青森県	全国との差	前年度における全国と差
学習指導要領の領域	数と計算	６１．７	－０．６	＋１．３
	量と測定	７４．８	＋２．１	－１．１
	図形	５８．７	＋１．８	＋３．８
	数量関係	６１．２	＋１．１	＋１．９
評価の観点	算数への関心・意欲・態度			
	数学的な考え方			
	数量や図形についての技能	６５．５	＋２．５	＋２．３
	数量や図形についての知識・理解	６４．３	＋０．５	＋０．７

□　学習指導要領の領域別では、本県は「量と測定」は全国をやや上回っており、「数と計算」「図形」「数量関係」は全国と同程度である。
□　前年度との比較では、学習指導要領の領域別で「量と測定」が前年度をやや上回っている。
□　評価の観点別では、「数量や図形についての技能」は全国をやや上回り、「数量や図形についての知識・理解」は全国と同程度である。
▼　学習指導要領の領域別「数と計算」の平均正答率が全国をやや下回っていることからことから、その改善を図りたい。
◆　「数と計算」領域の一層の定着を図るために、次のような指導を行う。

「数と計算」領域の一層の定着を図る指導
○問題を解決する過程で、数量の関係を捉え、数量の関係を図や数直線などに表す活動を位置付け、計算の意味の理解をもとに演算決定をすることができるようにする指導を行う。
○日常生活の問題の解決のために、複数の情報を関連付けて論理的に考察し、判断の理由について根拠を明確にして説明することができるようにする指導を行う。
○事象から規則性を見いだし、変化や対応の関係を基に、合理的、能率的に処理し、条件に合う事柄について適切に判断することができるようにする指導を行う。

（『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校 算数】』Ｐ．９参照）

３　設問（小問）別の結果と今後の対策

（１）全国平均との比較（全国の平均正答率よりも概ね１ポイント以上低い問題）

問題番号	問　題　の　概　要	平均正答率（%）	
		青森県	全国との差
１（１）	針金０．２ｍの重さと針金０．１ｍの重さを書く	６０．０	－２．９
１（２）	針金０．４ｍと、０．４ｍの重さの６０ｇと、１ｍの重さが、それぞれ数直線上のどこに当てはまるかを選ぶ	６３．５	－３．２
７（１）	円周率を求める式として正しいものを選ぶ	４０．３	－１．３

①概況及び課題

□　学習指導要領の領域別では、３問中２問が「数と計算」で１問が「図形」であった。

□　評価の観点別では、３問中２問が「数量や図形についての知識・理解」で１問が「数量や図形についての技能」であった。

▼　除法で表すことができる二つの数量の関係の理解や、１に当たる大きさを求める問題場面における数量の関係の理解し、数直線上に表すことについて課題がある。

②今後の対策・指導

◆　問題場面における二つの数量関係を理解できるようにするには、一方の数量が変化するともう一方の数量はどのように変わるのかを的確に捉えさせなければならない。二つの量の関係を具体物を使って作業をして確かめる活動や、一方が２倍や３倍になるともう一方も２倍や３倍になることを表や図を使って説明させる活動を多くする。

◆　数量の関係を図や数直線などに表すためには、数直線上の数量の対応関係や大小関係を的確に捉えることができるように指導する。１当たりの大きさを求める問題場面において、一方の数量を数直線上にとったときもう一方の数量は数直線上のどこに当たるのかや、図に示そうとしている数量は１より大きいのか等、数直線上で確認できるような活動を充実させていく。

（２）正答率の低い問題　（正答率が概ね６５％以下の小問。）

問題番号	問　題　の　概　要	平均正答率（%）	
		青森県	全国との差
１（１）	針金０．２ｍの重さと針金０．１ｍの重さを書く	６０．０	－２．９
１（２）	針金０．４ｍと、０．４ｍの重さの６０ｇと、１ｍの重さが、それぞれ数直線上のどこに当てはまるかを選ぶ	６３．５	－３．２
２	答えが１２÷０．８の式で求められる問題を選ぶ	４２．８	＋２．９
４（２）	㋒と㋓の二つのシートの混み具合を比べる式の意味について、正しいものを選ぶ	５０．９	＋０．８
５（２）	分度器の目盛りを読み、１８０°より大きい角の大きさを求める	６２．８	＋４．３

７（１）	円周率を求める式として正しいものを選ぶ	４０．３	－１．３
７（２）	円の直径の長さが２倍になったとき、円周の長さが何倍になるかを選ぶ	５７．０	＋１．４
８	２００人のうち８０人が小学生のとき、小学生の人数は全体の人数の何%かを選ぶ	５４．９	＋２．０

①概況及び課題

□　算数Ａの全国の平均正答率が昨年度より１５ポイント下がり、全体的に問題の難易度が上がったため、正答率が概ね６５％以下の小問が昨年度の１問から８問と増加した。

□　小問２は、小数の除法の意味について理解しているかどうかをみる問題であり、正答率が５０％以下であった。

□　小問７（１）は、円周率の意味について理解しているかどうかをみる問題であり、正答率が最も低かった。

▼　「図形」領域における円の学習では、直径の長さと円周の長さの関係や円周率の意味の理解について課題がある。

②今後の対策・指導

◆　作業的・体験的な活動を通して、直径の長さと円周の長さの関係について理解を深めることができるようにするために、次のような指導を行う。

①身の回りにある円の形をしたものについて、円周の長さや直径の長さを測定し、円周の直径に対する割合を調べる活動をする。

②直径の長さと円周の長さに着目にし、円周の長さが直径の長さの何倍になるのかについて見通しを持つことができるように指導する。

③実際に測定した身の回りにある円の形をしたものものの直径と円周の長さを比較させ、いつも直径の３．１４倍になっていることに気付くことができるように指導する。

（『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校 算数】』Ｐ．５３参照）

◆　「図形」領域の一層の定着を図るために、次のような指導を行う。

図形の構成要素や性質を基に論理的に考察させる

〇図形の見方や感覚を豊かにするために、図形を「重ねる」「折る」「回す」「切る」「線を引く」「測る」「作る」「構成する」等、ねらいに応じた作業的・体験的な活動を取り入れて指導する。

〇図形を構成する辺や角などの構成要素に着目して弁別ができるように指導する。

〇身の周りの具体的な形を、これまで学習してきた図形を構成する要素や性質に着目して概形として捉え、筋道立てて考えることがきるように指導する。

４　算数Ａに関する調査と質問紙調査との相関

（１）児童質問紙との相関

□　質問番号（３５）「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしていますか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率 (%)	差	全国(国公私立)
1	「当てはまる」	７０．３	22.0ポイント	７０．３
2	「どちらかといえば、当てはまる」	６１．６		21.2ポイント
3	「どちらかといえば、当てはまらない」	５５．１		
4	「当てはまらない」	４８．３		４９．１

◆　公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしていると回答した児童ほど正答率が高く、「当てはまる」と「当てはまらない」との差は２２．０ポイントであった。

公式やきまりの理解と定着を図るためには、公式を覚えさせて多くの練習問題を解かせるだけではなく、児童が数学的な見方・考え方を働かせることによって、自ら工夫して面積を求めることができるような過程を大切にし、図や式などをもとにして公式を理解させる授業づくりに努める必要がある。

□　質問番号（５５）「５年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「当てはまる」	７０．３	18.8ポイント	７０．０
2	「どちらかといえば、当てはまる」	６３．８		19.2ポイント
3	「どちらかといえば、当てはまらない」	５８．３		
4	「当てはまらない」	５１．５		５０．８

◆　５年生までに受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいたと回答した児童の正答率が高く、「当てはまる」と「当てはまらない」の差は１８．８ポイントであった。

学習課題を明確にし既習事項と関連付けて見通しをもたせることによって、児童一人一人が自分の考えをもてるようにするとともに、課題解決の場においては、個に応じた支援により主体的な学びができるような授業づくりに努める必要がある。

（２）学校質問紙との相関

□　質問番号（１３）「調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「そのとおりだと思う」	６５．９	11.6ポイント	６６．５
2	「どちらかといえば、そう思う」	６５．５		12.1ポイント
3	「どちらかといえば、そう思わない」	５８．４		
4	「そう思わない」	５４．３		５４．４

◆　授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思う学級ほど正答率が高く、そうでないと思う学級との差は11．6ポイントあった。

児童が主体的な学びができるように、次のような授業展開を大切にして指導することが必要である。

①「児童の問い」を引き出すように教材との出会わせ方を工夫する。
②「何を学ぶのか」を児童の発言をつないで学習課題を焦点化する。
③「どのように解決するか」の見通しを一人一人に確実にもたせる。
④「どのように解決しているか」の見取りをし、個に応じた支援をする。

Ⅳ　算数Ｂ「主として活用に関する問題」

１　科目全体の結果

算数Ｂ全体の平均正答率（%）		
青森県	全国との差	前年度における全国との差
５３	＋１	＋２

□　算数Ｂ全体としては、本県は、全国と同程度である。
□　本県と最上位県の平均正答率５９％との差は、－６ポイントである。

◆　基礎的・基本的な知識や技能を活用する力のさらなる向上に努める。

基礎的・基本的な知識や技能を活用する力を伸ばすために

○授業の導入段階で、本時の課題（問題）解決の見通しを児童にもたせ（解決に必要な考え方や知識・技能の関連を確かめて）、活用する意義を実感させてから、本時の課題（問題）に取り組ませる。

○「何を学んだか」「どのように学んだか」「何ができるようになったか」「次はどのようなことを学びたいか」等、学習の振り返りを大切にして、学んだことを次の学習に生かすことができるようにする。

○毎日の授業や単元のまとめで取り組む適用問題及び、家庭学習で取り組む課題プリントの中に、数字や図形などの条件のみを変えた問題など基礎的・基本的な知識や技能を活用する問題を意図的に入れ、基礎的な内容を基にして、児童が考え、表現する力を育成する機会を増やす。

２　分類・区分別の結果と今後の対策

分　　類	区　　分	平均正答率（%）		
		青森県	全国との差	前年度における全国との差
学習指導要領の領域	数と計算	５９．８	＋１．４	＋１．８
	量と測定	５３．５	＋１．１	＋３．９
	図形	６２．０	＋２．１	－０．１
	数量関係	４６．０	＋０．９	＋２．３
評価の観点	算数への関心・意欲・態度			
	数学的な考え方	５０．６	＋１．４	＋２．１
	数量や図形についての技能			
	数量や図形についての知識・理解	７２．０	＋０．３	＋０．９

□　学習指導要領の領域別では､本県は４領域全てにおいて全国と同程度かやや上回っている。
□　評価の観点別では、２観点とも全国と同程度である。
□　全国比の前年度との比較では、学習指導要領の領域別「図形」が２．２ポイント上回ったものの、他の３領域において０．４～２．８ポイント下回った。
▼　学習指導要領の領域では「数量関係」が全国比が他の領域と比べて低い。

◆　「数量関係」領域の一層の定着を図るために、次のような指導を行う。

「数量関係」領域の一層の定着を図る指導

○式に表す活動に加え、式を読む活動（式からそれに対応する具体的な場面を読む、式の表す事柄や関係を言葉の式に一般化するなど）もねらいにあわせバランスよく指導する。

○自分の考えを式を使って発表するだけでなく、友達が考えた式から問題解決の思考過程を読み取り、読み取ったことを交流し合う言語活動を設定する。

○「数と計算」「量と測定」の領域の授業に、場面を簡単な数に置き換えて考えたり、簡単な図や表などに数量の関係を表したりするなど、場面を的確に読み取る場を設定する。その際、単に問題場面を図に表現するなどの手続きを覚えさせるのではなく、問題場面がどのような関係を表しているのかを確認し、そのイメージを図などを用いて表現させることに留意する。

○「図形」の領域の授業に、図形の要素（辺の長さ、頂点の数など）などが決まれば、ほかの要素や事柄が決まるような問題を設定し、互いに対応づけて関係をみていく教材を意識的に扱い、事柄の変化の特徴を調べる場を設定する。

◆　「数学的な考え方」を身に付けさせるために、次のような取組をねらいに即して行うようにする。

「数学的な見方・考え方」を身に付けさせるために

○与えられた条件や根拠となる事実を明らかにして自分の考えを説明する場を設定した後、解決したことを振り返り、吟味・確認する活動をする。

○友達の考え方のよさや自分の考えとのつながりを考えることを観点とした話合い活動を設定した後、話し合ったよさや友達の考え方を活用して、発展的な問題を解く活動を行い、よりよく問題解決できる力を育成する。

３　設問（小問）別の結果と今後の対策

（１）全国平均との比較（全国の平均正答率よりも概ね１ポイント以上低い問題）

問題番号	問　題　の　概　要	平均正答率（%）	
		青森県	全国との差
２（２）	１回の玉入れゲームの時間を３分に最も近い時間にするための玉を投げる時間を、表に整理して求める	４６．９	－１．０

①概況及び課題

□　本県は小問２（２）で、全国の平均正答率を１．０ポイント下回った。

▼　日常生活の問題解決のために、示されている表を用いた考え方を解釈し、複数の場合に適用して、条件に合事柄について、適切に判断することに課題がある。

②今後の対策・指導

◆　一定の条件を基に、結果をメモにまとめ、その上で試行して結果を表に整理し、条件に合うものを判断することができるようにすることが大切である。試行して集めた複数の情報を基に事柄を判断する際、児童自らが試行した結果を表に整理し比較しようとする態度を育てるような指導に努める。

（『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校算数】』Ｐ．７４参照）

（２）正答率の低い問題（正答率が概ね５５％以下の小問。）

問題番号	問　題　の　概　要	平均正答率（%）	
		青森県	全国との差
１（２）	一つの点の周りに集まった角の大きさの和が３６０°になっていることを、着目した図形とその角の大きさを基に書く	５１．９	＋３．７
２（２）	１回の玉入れゲームの時間を３分に最も近い時間にするための玉を投げる時間を、表に整理して求める	４６．９	－１．０
３（１）	メモ１とメモ２は、それぞれ、グラフについてどのようなことに着目して書かれているのかを書く	２１．６	＋０．９
３（２）	一つの事柄について表した棒グラフと帯グラフから読み取ることができることをまとめた文章に当てはまるものを選ぶ	２３．５	－０．４
５（１）	横の長さが７ｍの黒板に輪かざりをつけるために必要な折り紙の枚数が、１００枚あれば足りるわけを書く	４４．１	＋０．９

①概況及び課題

□　上記５問とも評価の観点がすべて「数学的な考え方」の問題である。

□　指導要領の領域については、複数の領域が含まれる問題が上記５問中３問あり、領域別に見ると「数と計算」に係る問題が２問、「量と測定」に係る問題が３問、「図形」に係る問題が１問、「数量関係」に係る問題が３問であった。

□　上記５問の無答率は、全国平均を下回っていたことから、本県の児童は、問題に対して粘り強く取り組んでいることが窺える。

▼　日常生活と関連付けて、数量や図形の意味を実感的に理解させるために、作業的・体験的な活動を行い、きまりや共通性を見つけたり、見つけたことを一般化したりして、概念化を図る機会を増やす必要がある。

▼　小問１（２）については、図形の構成要素や性質を基に、筋道を立てて考え、事柄が成り立つことを説明することに課題がある。

▼　小問３（１）については、グラフの特徴を複数の観点で捉えて、情報を読み取ることができるようにするために、他者が読み取った情報や観点をグラフと関連付けて解釈することに課題がある。

▼　小問３（２）については、あるグラフから読み取った情報が適切かどうかを検討したり、考察した結果から見いだした新たな問題を解決したりするために、グラフを新たに作り、それぞれのグラフから読み取ることができる情報を関連付けながら考察することに課題がある。

▼　小問５（１）については、日常生活の問題の解決のために、複数の情報を解釈し関連付けて論理的に考察し、判断の理由について根拠を明確にして説明することが課題である。

②今後の対策・指導

◆　数学的に表現する力を伸ばすためには、次のような指導を行う。

数学的に表現する力を伸ばすための指導

〇日常生活の事象と関連付けて考える活動や、算数で学んだことを使って日常生活の事象を解決する活動の充実を図る。

〇説明として必要な根拠を満たしているか吟味することを観点とした話合いを行い、よ

りよい説明に高めて表現する指導の充実を図る。
○問題を解決した後、学習したことを児童がさらに発展させて新たな問題を見つけたり、数値や形などの異同を確認しながら理由を考えたりする活動の充実を図る。
○学習の結果のみではなく、自分の考えがどのように変わってきたかなどの学習の過程を振り返る活動の充実を図る。

◆　数学的な考え方を用いて、合理的に判断し、能率的に処理する活動や、根拠となる事柄を過不足なく説明する指導を行う。
◆　言葉や数、式、図、表、グラフなどを関連付けて考え、考えたことを言葉や式で表現する活動を多く取り入れる。
◆　小問１（２）については、合同な多角形で敷き詰められているとき、敷き詰められた図形の一点の周りに集まった角の大きさの和が３６０°になることを理解できるようにすることが大切である。筋道を立てて考え、事柄が成り立つことを説明できるようにする指導をする。
（『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校算数】』Ｐ．６７参照）
◆　小問３（１）については、グラフのどの部分に着目して読み取った数値なのかを、グラフと関連付けて捉え、グラフのどの部分に着目して読み取ったのかを説明し合い、その数値を読み取った観点について明らかにする学習活動を展開する。
（『平成３０年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイデア例』Ｐ１１、１２参照）
◆　小問３（２）については、グラフから読み取った情報が適切かどうかを検討したり、考察した結果から見いだした新たな問題を解決したりするために、目的に応じたグラフを新たに作り、それぞれのグラフから読み取ることができる情報を関連付けながら考察する活動を取り入れる。
（『平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校算数】』Ｐ．８０参照）
◆　小問５（１）については、複数の数量の情報を児童自らが簡潔にまとめることができるようにした上で、数量を解釈して関連付けて、数量の関係を見いだすことができるように指導する。また、用いた数の意味や式の意味、答えの意味など根拠を明確にしながら説明する学習活動を展開する。
（『平成３０年度全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイデア例』Ｐ．１３、１４参照）

４　算数Ｂに関する調査と質問紙調査との相関

（１）児童質問紙との相関

□　質問番号（３１）「算数の問題の解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率（%）	差	全国（国公私立）
1	「当てはまる」	５９．６	28.1ポイント	５９．２
2	「どちらかといえば、当てはまる」	５０．６		26.3ポイント
3	「どちらかといえば、当てはまらない」	４２．１		
4	「当てはまらない」	３１．５		３２．９

◆　算数の問題の解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考えると回答した児童ほど正答率が高く、「当てはまる」と「当てはまらない」の差は２８．１ポイントであった。
課題を解決するときに、既習の知識や技能を主体的に活用できるようにすることが大切

である。既習の知識を基に分かることを図に表したり、課題の図形に補助線を引いて見方を変えたりできるように具体的な指導をする。また、問題を解く場合には一つの方法だけで終わるのではなく他の方法でも解けるか考えさせるとともに、いろいろな考え方を学級で共有する活動の充実に努める必要がある。

□　質問番号（５６）「５年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「当てはまる」	５８．３	17.8ポイント	５９．０
2	「どちらかといえば、当てはまる」	５４．５		18.7ポイント
3	「どちらかといえば、当てはまらない」	４８．３		
4	「当てはまらない」	４０．５		４０．３

◆　自分の考えを発表する機会では、自分の考えが上手く伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表ができていると思う学級ほど正答率が高く、そうでないと思う学級との差は１７．８ポイントであった。

算数に限らず、自分の考えをうまく伝えることができるよう、発表の場の設定や発表のさせ方などを工夫するとともにペアやグループ、全体での話合いでは、論点や議題を明確にして、対話的な学びの充実に努める必要がある。

（２）学校質問紙との相関

□　質問番号（２２）「調査対象学年の児童に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「よく行った」	５４．２	6.0ポイント	５２．８
2	「どちらかといえば、行った」	５２．２		3.7ポイント
3	「あまり行っていない」	４８．２		
4	「全く行っていない」	―		４９．１

◆　前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をよく行ったと思う学級ほど正答率が高く、あまり行っていないと思う学級との差は６．０ポイントであった。

児童が数学的な見方・考え方を働かせながら知識・技能を習得することや、習得した知識・技能を活用して探究できるような授業展開になっているかを授業者が振り返ったり、互いの授業を参観し合ってよりよい指導法について共有したりするなど、授業改善に努める必要がある。

□　質問番号（２６）「調査対象学年の児童に対して、前年度に、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けましたか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「よく行った」	５３．８	8.3ポイント	５３．１
2	「どちらかといえば、行った」	５２．８		5.5ポイント
3	「あまり行っていない」	４５．５		
4	「全く行っていない」	―		４８．６

◆　前年度に、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けている学級ほど正答率が高く、あまり行っていないない学級との差は８．３ポイントであった。

児童が課題を解決するときに、既習事項と結び付けて考えることができる工夫をすることで、一人一人が考えをもち主体的に取り組むことができるようにし、日常生活の事象と関連付けて考える活動や、算数で学んだことを使って日常生活の事象を解決する活動を充実させた授業に努める必要がある。

＜平成２９年度県学習状況調査を踏まえて（算数）＞

【知識・理解】

平成２９年度県学習状況調査実施報告書において、「数と計算」では、除法の計算の結果についておおよその大きさを捉える力、「図形」では、既習の図形の性質を使って筋道立てて説明する力や立体図形の辺や面のつながりや位置関係に着目し思考・判断する力が十分とは言えなかった。また、「数量関係」では、伴って変わる２つの数量の関係について、変化の特徴や式と関連付けて考えることが課題であり、今後の指導においては、示された生活場面や条件に従って、既習内容を関連付けて論理的に考察する活動や、図をかいたり読み取ったりする活動を取り入れた授業を計画的に行うことが有効であるとした。

平成３０年度全国学力・学習状況調査では、学習指導要領の領域や評価の視点で見ると全国の正答率と比較して、同程度かやや上回っている状況であるが、「数と計算」だけは０．６ポイント下回っており、昨年度の全国比と比べて１．９ポイント下回っていることから、今後は「数と計算」の領域への指導に重点を置きながら指導する必要がある。

【数学的な見方・考え方】

平成２９年度学習状況調査実施報告書において、「数学的な考え方」では、既習事項を基に筋道を立てて説明する力、「数量や図形についての知識・理解」では、示された概数の式の目的を判断する力や図形やグラフに関する知識を活用して問題を解決する力が課題であり、今後の指導として、目的に応じて式や表、グラフを選び活用する活動、個々の考えを言葉や数、式、表、グラフなどを使って説明する活動を取り入れた授業に努めることとした。

また、活用については、例示された考え方や友達の説明を読み取りながら、学んだ知識や技能を関連付けて分かりやすく説明することが課題であり、集団思考の場面で、一人の考えを聞いた後、何人かに繰り返して説明させ、聞き手が話すことで理解を深めたり、一つの考えについて予め何人かに指名しておいて、前の人と違いを意識させながら説明させたりして、友達の説明を聞く必要感を高めた授業を行うことが大切であるとした。

平成３０年度の全国学力・学習状況調査では、算数Ｂにおいて全「活用」に関する問題で出題された「数学的な考え方」の９問中、正答率の低い５問を本冊子では取り上げたが、そのうち３問が「数量関係」の領域に関係している。今後も「数量関係」の領域への指導に重点を置きながら指導する必要がある。

Ⅴ　理科

１　科目全体の結果

理科全体の平均正答率（%）	
青森県	全国との差
６２	＋２

□　本県の理科全体の平均正答率は、全国をやや上回っている。
□　本県の無答率は、１６問中１５問において、全国の平均無答率を下回っており、その他の１問は全国と同じであることから、問題に対して粘り強く取り組んでいることが窺える。
□　問題形式別平均正答率では、「短答式」「記述式」で全国をやや上回っており、「選択式」においては全国と同程度である。
□　最上位県の平均正答率は６６％であり、本県との差は－４ポイントである。
◆　引き続き､基礎的・基本的な知識や技能及びこれらを活用する力のさらなる向上に努める。

理科の授業で大事にしたいこと

○自然の事物・現象から問題を見いだし、適切に課題づくりができるようにする。
○予想や仮説を設定し、検証する実験を計画できるようにする。
○観察・実験の結果を分析して解釈できるようにする。
○自らの考えや他者の考えを、検討して改善できるようにする。
○日常生活や社会の特定の場面において、理科で学習した知識・技能を活用できるようにする。

２　分類・区分別の結果と今後の対策

分　　類	区　　分	平均正答率（%）	
		青森県	全国との差
枠組み	主として「知識」に関する問題	８２．０	＋４．０
	主として「活用」に関する問題	５８．０	＋１．８
学習指導要領の領域	物質	６３．１	＋３．３
	エネルギー	５６．９	＋３．８
	生命	７４．５	＋０．９
	地球	５０．７	＋１．２
評価の観点	自然事象への関心・意欲・態度	８１．６	－０．５
	科学的な思考・表現	５５．８	＋１．７
	観察・実験の技能	７３．５	＋２．４
	自然事象についての知識・理解	８６．４	＋４．９

□　枠組みでは、主として「知識」に関する問題が全国をやや上回るが、主として「活用」に関する問題は同程度である。
□　学習指導要領の領域別では、「物質」「エネルギー」が全国をやや上回るが、「生命」「地球」は同程度である。
□　評価の観点別では、「観察・実験の技能」「自然事象についての知識・理解」が全国をやや上回るが、「自然事象への関心・意欲・態度」「科学的な思考・表現」は同程度である。
◆　「生命」･「地球」領域の科学的な思考・表現の育成を図るために、次のような指導を行う。

「生命」･「地球」領域の科学的な思考・表現の育成を図るための具体的指導

○「生命」の領域については、学習を通して獲得した知識を実際の自然や日常生活に適用できるようにする指導の充実が求められる。そのためには、例えば、人がどのように体を動かしているのかを表現する手段として、実際に腕が曲がる仕組みを筋肉の様子と関係付けて考え、身近なものを使った模型を用いて説明することができるように指導する。
○「地球」の領域では、実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述できるように

する指導の充実が求められる。そのためには、自分の予想にとらわれずに事実と解釈の両方を表現することができるように指導する。さらに、複数の情報を関係付けながら多面的に分析して考察できるようにする指導の充実が求められる。そのためには、児童が目的に応じて分担して収集した複数の情報から、どのようなことが言えるのかを話し合うことを通して得られた要点を整理し、それらを関係付けながら多面的に分析できるように指導する。

（「平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書【小学校理科】Ｐ．２９、３８）

３　設問（小問）別の結果と今後の対策

（１）全国平均との比較（全国の平均正答率よりも概ね１ポイント以上低かった問題）

問題番号	問　題　の　概　要	平均正答率（%）	
		青森県	全国との差
１（２）	鳥の翼と人の腕のつくりについてのまとめから、どのような視点を基にまとめた内容なのかを選ぶ。【活用】	７４．８	－１．４
２（４）	上流側の雲の様子や雨の降っている所と下流側の川の水位の変化から、上流側の天気と下流側の水位の関係について言えることを選ぶ。【活用】	５４．６	－５．２

①概況及び課題

□　上記２問中すべてが「科学的な思考・表現」に関する問題であり、かつ「活用」に関する問題であった。

②今後の対策・指導

◆　小問１（２）については、調べた結果を基に考察する際に、問題に対応した視点で分析できるようにするためには、問題を明確にし、その視点に沿って結果から必要な情報を適切に選択することが大切である。また、調べた結果の中から、「問題に対応した考察に必要な情報は何か」という視点で選択、整理して考察できるようにすることも大切である。指導に当たっては、本設問のように、「鳥のつばさの骨」、「人の手やうでの骨」を「同じところ」、「ちがうところ」で比較した結果を基に考察する際に、どのような問題意識をもってまとめられているのかを確認することや、「同じところ」、「ちがうところ」で書かれている内容は、何について書かれているのかを話し合うなどの学習活動が考えられる。

◆　小問２（４）については、複数の情報を関係付けながら、多面的に分析して考察できるようにするためには、複数の情報を収集して児童同士が共有し、それを関係付けたことの話合いを重視した学習活動が大切である。指導に当たっては、本設問のように、雲の様子や川の水位などを観察した結果や、気象レーダーや雲画像の内容など、児童が目的に応じて複数の情報を分担して収集し、それらの複数の情報からどのようなことが言えるのかについて、話し合うことを通して情報を関係付けながら、多面的に分析することが大切である。児童が問題の解決に必要な情報をリアルタイムに収集・蓄積したり、その情報をグループや学級全体で共有したりすることができるように、タブレットＰＣや電子黒板などの活用が考えられる。それらのＩＣＴ機器を活用し、時間的な変化を繰り返し確認し、気象レーダーや雲画像の内容などの収集した複数の情報を、時間や場所などと関係付けながら多面的に分析することが大切である。また、それらの分析をより妥当なものとするためには話合いなどの学習活動が大切である。

（引用：「平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書　小学校理科」国立教育政策研究所）

（２）正答率の低い問題（正答率が概ね６５％以下の小問）

問題番号	問　題　の　概　要	平均正答率（%）	
		青森県	全国との差
１（４）	人の腕が曲がる仕組みについて、示された模型を使って説明できる内容を選ぶ。【活用】	５７．９	＋１．３
２（２）	流れる水の働きによる土地の侵食について、自分の考えと異なる他者の予想を基に、斜面に水を流したときの立てた棒の様子を選ぶ。【活用】	５６．２	＋０．８
２（３）	一度に流す水の量と棒の様子との関係から、大雨が降って流れる水の量が増えたときの地面の削られ方を選び、選んだわけを書く。【活用】	１９．５	－０．６
２（４）	上流側の雲の様子や雨の降っている所と下流側の川の水位の変化から、上流側の天気と下流側の水位の関係について言えることを選ぶ。【活用】	５４．６	－５．２
３（２）	回路を流れる電流の流れ方について、自分の考えと異なる他者の予想を基に、検流計の針の向きと目盛りを選ぶ。【活用】	５１．９	＋４．２
３（３）	回路を流れる電流の向きと大きさについて、実験結果から考え直した内容を選ぶ。【活用】	６１．４	＋２．０
３（４）	目的の時間帯だけモーターを回すため、太陽の１日の位置の変化に合わせた箱の中での光電池の適切な位置や向きを選ぶ。【活用】	４３．９	＋２．０
４（３）	食塩を水に溶かしたときの全体の重さを選ぶ。【活用】	４７．５	＋４．８
４（４）	食塩水を熱したときの食塩の蒸発について、実験を通して導きだす結論を書く。【活用】	４０．６	＋４．７

①概況及び課題

□　上記９問中全てが「科学的な思考・表現」についての問題であった。
□　上記９問中全てが「活用」に関する問題であった。
□　上記９問中８問が全国と同程度かやや上回っており、１問が全国を下回っていた。
▼　科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりする力を伸ばす必要がある。
▼　実験結果を基に自分の考えを改善したり、自然の事物・現象の存在や変化に着眼して、学習した知識を活用したりできるようにする必要がある。

②今後の対策・指導（上記（１）にも該当する小問については、ここでは省略する。）

◆　小問１（４）については、学習を通して獲得した知識を実際の自然や日常生活など他の場面に適用して考えることができるようにするためには、主体的な問題解決を通して獲得した知識を、日常生活と関係付けて図や模型を用いて考えたり、説明したりすることが大切である。指導に当たっては、本設問のように、人がどのように体を動かしているのかということを表現する手段として、実際に腕が曲がる仕組みを筋肉の様子と関係付けて考え、模型を用いて説明するなどの学習活動が考えられる。なお、模型については、知識を他の場面に適用するだけでなく、解決したい問題についての予想や仮説を発想する場面などで説明のために活用することも大切である。

◆　小問２（２）については、予想が確かめられた場合に得られる結果の見通しをもって実験を構想できるようにするためには、既習の内容や生活経験を基に根拠のある予想や仮説を立て、構想した実験方法が検証可能かどうかを検討し、結果まで見通しをもつことが大切である。指導に当たっては、例えば、実験を構想する際には、どのような予想を確かめたい実験なのかを明確にし、実験方法の妥当性や得られる結果の見通しなどを児童同士で検討する場面を設定したり、その内容を発表したりするなどの学習活動が考えられる。また、本設問のように、自分の考えと異なる他者の予想に対しても結果の見通しをもつことができるようにし、内容を共有することにより、より妥当な実験方法について話し合うことができるようにしていくことが大切である。

◆　小問２（３）については、実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述できるようにするためには、観察や実験の結果を基に「事実」と「解釈」の両方を示しながら、説明できるようにすることが大切である。指導に当たっては、自分の予想にとらわれずに事実と解釈の両方を表現することで、より的確な説明になることを捉えられるように指導することが大切である。また、解釈した内容が問題と正対しているかを確認するなどの学習活動が考えられる。本設問のように、実験結果である倒れた棒の本数を表などに整理して、考えの根拠となる事実を明確にすることが大切である。また、事実（条件と結果）と、その解釈（結果から考えられること）の両方を整理して説明する学習活動が考えられる。

◆　小問３（２）については、実験結果の見通しを伴った解決の方向性を構想できるようにするためには、自らの予想や仮説を基に実験計画を立案し、実験を行う前に、予想が確かめられた場合に得られる実験結果を見通すことが大切である。指導に当たっては、本設問のように、回路の中をどのように電流が流れているかについて、第３学年「電気の通り道」の学習内容や生活経験と関係付けて、根拠のある予想や仮説を設定し、図などで表現しそれを基に話し合う学習活動が考えられる。また、実験方法を構想し、予想したことが確かめられた場合に得られる結果の見通しを行い、それぞれの見通しを話し合う場面を取り入れ、自分と異なる予想をした他者の予想が確かめられた場合に得られる結果の見通しを共有する学習活動も考えられる。児童が他者の予想の内容も捉えつつ、見通しをもって実験を構想できるようにすることが大切である。また、検流計を複数用いて実験を行うなど、児童が構想した実験方法を実現できるようにすることも大切である。

◆　小問３（３）については、実験結果を基にして、より妥当な考えに改善できるようにするためには、予想とその予想から実験結果までを見通し、実験から得られた結果を照らし合わせて考えることが大切である。指導に当たっては、本設問のように、実験方法を構想する前に予想したことを話し合う場面を取り入れ、自分と異なる予想をした他者の予想が確かめられた場合に得られる結果の見通しを共有する学習活動が考えられる。他者の予想と結果の見通しを把握することで、実験後に自分の予想と実験結果とを比べるとき、他者の多様な考えを振り返り、より妥当な考えに改善できるようにすることが大切である。また、実験結果を書き込む際には、あらかじめ結果の見通しも記録できるようにすることで、自分の結果の見通しと実験結果を比較しやすくする工夫も考えられる。自分の結果の見通しと実験結果が一致すれば、自分の予想が妥当であると判断ができ、不一致の場合は予想、実験方法などを見直し、より妥当な考えに改善できるようにすることが大切である。

◆　小問３（４）については、学んだことを基にしたものづくりへの適用ができるようにするためには、ものづくりの目的や獲得した知識をものづくりにどのように活用するかを明らかにするとともに、できたものが目的に合ったものになっているかを振り返り、設定した目的に対して、計測し、制御する学習活動を保障することが大切である。指導に当たっては、例えば、設定したものづくりの目的に対し、必要な知識を明らかにすることが大切である。その際、複数の領域や単元で獲得した知識を適用することも考えられる。本設問のように、「午後１時頃から午後３時頃のメダカの水槽の水温を下げるようにしたい」という目的を達成するには、これまでに獲得した知識として、「時間経過による太陽の位置や動き」と、「光が当たったときに発電する光電池の性質」を児童が想起し、ものづくりへ適用できるようにすることが大切である。さらに、光電池を入れる箱の切れ込みの幅、設置する光電池の角度などは、獲得した知識の適用だけでなく実際につくりながら、試す中で調節が必要であり、「ある時間だけ光電池を発電させる」という目的を設定し、実際の発電状況を計測して、繰り返し試しながら光電池の置き方を制御するといった学習活動が考えられる。

◆　小問４（３）については、学んだことを自然の事物・現象に適用できるようにするためには、既習の内容や生活経験と関係付けて話し合う場を設定し、提示された自然の事物・現象を捉えることができるようにすることが大切である。指導に当たっては、本設問のように、食塩水について、事実は「400mLの水に食塩が12ｇ溶けている」ということであり、分からないことは「食塩水全体の重さ」であることを話し合い、明らかにする学習活動が考えられる。その際、「物を水に溶かしても重さは変わらない」、「水は１mLが１ｇ」という既習の内容と食塩水を関係付けて、根拠をもって自分なりの考えを述べる

ことが大切である。また、「物が水に溶ける」ということについては、水に溶けた物は視覚で捉えることができないため、水溶液の重さや体積をはかり、定量的に考えることができるようにすることが大切である。さらに、物が水に溶ける様子を絵や図等を用いて表現することで質的・実体的な視点で捉えることができるようにすることも考えられる。

◆　小問４（４）については、実験結果を基に分析し、問題に正対したまとめができるようにするためには、問題を確認し、実験などで得られた結果を根拠とした考察を行い、実験結果から言えることだけに言及した内容かどうかについて検討することが大切である。指導に当たっては、本設問のように、食塩水を加熱したり、日なたに置いたりすることで得られた結果を事実として的確に捉え、事実から解釈したことを「実験の結果からいえること」として言及することが大切である。また、より妥当な考えに改善していくためには、問題解決の様々な場面で自分の考えを表現したり、他者の考えを聞き、それを基に自分の考えを振り返ったり、見直したりするなどの話合いを重視した学習活動が考えられる。

（引用：「平成３０年度全国学力・学習状況調査報告書　小学校理科」国立教育政策研究所）

４　理科に関する調査と質問紙調査との相関

（１）　児童質問紙調査との相関

□　質問番号（４５）「理科の授業で、自分の考えをまわりの人に説明したり発表したりしていますか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「当てはまる」	６６．７	12.1ポイント	６５．７
2	「どちらかといえば、当てはまる」	６３．１		12.2ポイント
3	「どちらかといえば、当てはまらない」	５９．５		
4	「当てはまらない」	５４．６		５３．５

◆　自分の考えを説明したり発表したりしている児童の方が正答率が高いことから、指導に当たっては、一人一人の児童が自分の考えをもつ場面、考えを説明したり発表したりする場面などをどこに設定するか、友だちとどのように交流させるかなど工夫しながら指導する。

□　質問番号（４９）「理科の授業で、観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えていますか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「当てはまる」	６５．４	17.1ポイント	６４．６
2	「どちらかといえば、当てはまる」	６０．４		16.9ポイント
3	「どちらかといえば、当てはまらない」	５５．４		
4	「当てはまらない」	４８．３		４７．７

◆　観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えている児童の方が正答率が高いことから、指導に当たっては、観察、実験の計画を立てさせたり、結果を予想させたりする場面を大切にするとともに、得られた結果から何が言えるか自分の考えをまとめる場面、自分の考えを友達に説明する場面などを工夫して指導する。

（２）　学校質問紙調査との相関

□　質問番号（４７）「調査対象学年の児童に対して、前年度までに、自ら考えた仮説をもとに観察、実験の計画を立てさせる指導を行いましたか」

〈本県の状況〉

選択肢		平均正答率(%)	差	全国(国公私立)
1	「よく行った」	６２．５	5.8ポイント	６１．７
2	「どちらかといえば、行った」	６１．８		3.9ポイント
3	「あまり行っていない」	６０．８		
4	「全く行っていない」	５６．７		５７．８

◆　自分の仮説をもとに観察・実験の計画を立てる活動をよく行っている児童の方が正答率が高いことから、指導に当たっては、これまでの学習内容や生活経験と関係付けて根拠のある予想や仮説を発想し、図などで表現するなどして話し合うことができるように指導する。

〈平成２９年度県学習状況調査を踏まえて（理科）〉

【主として「活用」に関する問題】

Ｈ２９学習状況調査実施報告書において、「活用」に関する問題については、学習したことを基に、身の回りで起きている事象について考えることが課題としてあげられていた。今後の指導として、身に付けた知識・技能を生かしたものづくり等に取り組ませるなどして、主体的に問題を解決する力を育むとともに、児童の断片的な知識を体系的な知識へと再構成する学習活動も適宜取り入れることが大切であるとした。

Ｈ３０年度の全国学力・学習状況調査では、「活用」について全国の平均正答率を１．８ポイント上回った。今後は、学習内容や生活経験と関係付けて根拠のある予想や仮説を発想し実験計画を立案すること、実験結果を分析して得た自分の考えを友だちに説明したり発表したりして、お互いの考えを深め合うことなどを、単元や本時に計画的に位置付け、段階的に指導することが大切である。

【観察・実験の技能】

Ｈ２９学習状況調査実施報告書において、評価の観点別にみた課題としては、温度計や方位磁針等の観察・実験器具の操作技能の定着が課題として挙げられていた。今後の指導においては、観察・実験器具の操作方法の指導に加え、繰り返し使用させて技能の習熟を図ることが大切であるとした。

Ｈ３０年度の全国学力・学習状況調査では、「観察・実験の技能」について全国の平均正答率を２．４ポイント上回った。

今後も、観察・実験器具の適切な操作方法を身に付けるため、器具の操作の手順の理解だけでなく、器具を使用する目的や操作の意味を捉えることが大切である。

Ⅵ　質問紙調査

１　児童質問紙調査の結果と今後の対策

（１）学習に対する関心・意欲・態度及び学習状況

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
55　５年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか　【「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計】	８１．８	＋５．１	（新規）
56　５年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思うか　【「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計】	６６．３	＋５．３	－１．３

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　５年生までに受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた児童の割合は、全国を上回っている。

【望ましい回答の割合が前年度県平均より１０ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
57　学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができているか　【「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計】	８２．４	＋４．７	＋１０．５

□　学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている児童の割合は全国を上回っているとともに、前年度よりも大きく上回った。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問：なし】

②今後の対策・指導

◆　授業を行うに当たっては、引き続き、次のようなことを心がけるようにする。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のために

○児童の各教科等に対する興味・関心が高まるよう工夫するとともに、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる場面を授業に位置付けるようにする。

○児童の実態、学習の目標や内容に応じて、ペアやグループなど学習形態を工夫しながら考えや意見を発表し合う機会を意図的に設け、どの児童にも自分の考えを相手に伝える体験をさせる。また、友達の意見を共感的に聞けるよう、引き続き、話しやすい学級の雰囲気づくりにも心がけ、児童が自信をもって話すことができるようにする。

○書く活動を授業の中で形式的に取り入れるのではなく、児童の気付き、驚き等を引き出す授業を展開するとともに、児童にとって必然性のある表現活動を設定し、意欲的に書いたり話したりする活動に取り組めるようにする。

（２）学習時間等

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
10　家で、自分で計画を立てて勉強しているか 【「している」「どちらかといえば、している」の合計】	７５．８	＋８．２	＋５．７
12　家で、学校の授業の予習・復習をしているか 【「している」「どちらかといえば、している」の合計】	８２．６	＋２０．０	（新規）
13　家で、予習・復習やテスト勉強などの自学自習において、教科書を使いながら学習しているか　【「している」「どちらかといえば、している」の合計】	８５．５	＋１５．６	（新規）

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　家で、学校の授業の予習・復習をしている児童の割合は、全国を極めて大きく上回っている。

□　家での自学自習において、教科書を使いながら学習している児童の割合は、全国を極めて大きく上回っている。

□　家で、自分で計画を立てて勉強している児童の割合は、全国を大きく上回っている。

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
11　家で、学校の宿題をしているか 【「している」「どちらかといえば、している」の合計】	９７．６	＋０．５	＋０．３

□　家で、学校の宿題をしている児童の割合が、極めて高い。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
15　学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、読書をしているか 【「1時間以上」の合計】	２０．２	＋０．９	＋４．１

▼　普段、１時間以上読書をしている児童の割合は、２割程度であるが、前年度よりやや高くなっている。

②今後の対策・指導

◆　今後も家庭での学習が計画的・継続的に行われるよう支援するとともに、学ぶことや方法を児童自らが選び、家庭学習に取り組めるよう支援する。

◆　各教科等の指導として、学習したことが読書活動に発展するような授業展開を工夫する。また、その内容を学級通信等を活用して家庭に情報発信し、家庭でも読書習慣を身に付けさせるよう、家庭との連携を図る。

（３）基本的生活習慣等

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
7　朝食を毎日食べているか 【「している」「どちらかといえば、している」の合計】	９５．２	＋０．７	－０．９

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　朝食を毎日食べている児童の割合は、全国をやや上回っている。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

②今後の対策・指導

◆　道徳や特別活動など、さまざまな機会を通じて、具体的な事例を示し、基本的な生活

習慣や節度ある生活を身に付けさせるようにする。

◆　保護者集会や各種通信等を通じて、基本的な生活習慣や節度ある生活を身に付けさせるよう、家庭との連携を一層図る。

（４）地域・社会との関わり

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
21　地域や社会で起こっている問題や出来事に関心があるか 【「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計】	７０．４	＋６．６	＋２．９
22　地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがあるか 【「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計】	５８．５	＋８．６	＋１０．８

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある児童の割合は、全国を上回っている。

□　地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある児童の割合は、全国を大きく上回っているとともに、前年度と比べ１０．８ポイント上回った。

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問：なし】

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

（参考：学校質問紙**20**より）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
20　今住んでいる地域の行事に参加しているか 【「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計】	６０．３	－２．４	＋４．２

□　「今住んでいる地域の行事に参加している」児童の割合は、全国平均を下回ったが、前年度を上回っている。

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
23　地域社会などでボランティア活動に参加したことがあるか 【「したことがある」の合計】	４０．２	＋４．１	＋１．３
24　地域の大人(学校や塾・習い事の先生を除く)に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがあるか 【「よくある」「時々ある」の合計】	４５．５	＋３．９	＋１．３
25　新聞を読んでいるか 【「週1回以上」の合計】	２２．５	＋２．６	－１．０

▼　地域社会などでボランティア活動に参加したことがある児童の割合は、全国を上回っているものの、５割に満たない。

▼　地域の大人に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがある児童の割合は、全国及び前年度を上回っているが、５割に満たない。

▼　新聞を週１回以上読む児童の割合は、全国を上回っているものの、２割程度にとどまっており、前年度を下回った。また、新聞をほとんど、または、全く読まない児童の割合は、５割程度である。

②今後の対策・指導

◆　地域の人たちや関係機関の協力を得ながら、引き続き、次のようなことを心がける。

地域社会との関わりの質的な充実を図るために

○各教科等の学習において、新聞を適宜活用し、適切な題材や場面で地域社会とのつながりをもたせた学習指導を行う。

○総合的な学習の時間の学習素材として、地域の行事や祭りなどの地域に関する内容を取り扱い、自分が住んでいる地域に対する興味・関心をもたせるようにする。具体的には、地域の人たちに関わる場を設定したり、地域の自慢できることを検討したりす

る学習活動を取り入れ、地域のよさを児童自ら再確認することによって、地域の一員としての自覚や参画する意識を育てるようにする。また、地域の人たちとの触れ合いは、児童の視野を広げ、自己の将来を具体的に描くことや学習に対する意欲付けにつながる効果も期待できることから、地域の人材バンクの作成に努める。

（５）児童の意識

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
1　自分には、よいところがあると思うか 【「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計】	８６．４	＋２．４	＋６．１

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　自分にはよいところがあると思う児童の割合は、全国及び前年度を上回った。

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
5　いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思うか　【「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計】	９８．１	＋１．３	＋１．０

□　いじめはいけないことだと認識している児童の割合が、極めて高い。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問：なし】

②今後の対策・指導

◆　学級内で一人一人に役割を与えたり、活躍できるような活動を取り入れたりするなど自己肯定感をもたせる指導や自己有用感をもたせる活動を設定し、今後も児童のよさをより一層積極的に評価していく。

◆　学習規律やきまり、約束を守ることの大切さを今後も継続して指導していく。

◆　あらゆる機会を通じて、「いじめは人間として絶対に許されない」という意識を徹底させるとともに、引き続き、児童同士の心の結び付きを深め、社会性を育む活動を推進し、いじめの未然防止を図る。

２　学校質問紙調査の結果と今後の対策

（１）学習態度

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問：なし】

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問：なし】

（参考：学校質問紙**12**より）

・児童が授業中の私語が少なく落ち着いていると感じている学校の割合は、全国８９．４％に対して青森県８５．９％と３．５ポイント下回るとともに、前年度を０．３ポイント下回っている。

②今後の対策・指導

◆　授業を行うに当たっては、これまでと同様に、児童生徒が授業に主体的に取り組むことができるよう、学習意欲を高める工夫が必要である。

主体的な学習態度を育てるために

○主体的に学習に取り組むことのよさを感じさせ、望ましい学習に向かう姿勢を積極的に認めるようにする。

○授業の導入段階で、児童の興味関心をもとに学習課題を設定するなど、児童の学習への意欲を喚起する。

○児童が学習を行う上で、見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりするなどの主体的な学習活動を重視する。

◆　「私語をしない」「話している人の方を向いて聞く」などの学習規律に関する指導を継続する。

（２）指導方法・学習規律

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
23　将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしたか　【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９１．７	＋８．４	＋２．０

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしている学校の割合は、前年度を上回るとともに全国を大きく上回っている。

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
24　前年度までに、学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマを与えたか　【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９７．２	＋０．７	＋５．６
25　学習規律の維持を徹底したか　【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９８．３	＋０．６	＋１．２
30　学校生活の中で、児童一人一人のよい点や可能性を見付け、児童に伝えるなど積極的に評価したか　【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９８．６	－０．４	－０．４

□　ほぼ全ての学校で、学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマを与えて指導に当たっている。

□　ほぼ全ての学校で、学習規律の維持を徹底している。

□　ほぼ全ての学校で、学校生活の中で、児童一人一人のよい点や可能性を見付け、児童に伝えるなど積極的に評価している。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問：なし】

②今後の対策・指導

◆　授業を行うに当たっては、引き続き、次のようなことを心がけるようにする。

主体的な学習態度を育てるために

○児童の問い・驚き・気付きを大事にし、児童にとって分かりやすく課題（めあて）を設定する。

○一人一人の児童に自分の考えをもたせた上でグループ学習やペア学習等の話合い活動の場を設定し、考えを深めさせたり広げさせたりする。

○振り返りの場では、児童の言葉で学習のまとめをするとともに、学習を通して自分ができるようになったことや分かったことなどを話させ、児童自身に学びを自覚させるようにする。

（３）学力向上に向けた取組等

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
16　各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列しているか　【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】	９７．６	＋２．９	＋１０．４
19　指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組	９７．９	＋１．９	＋６．０

み合わせているか。 【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】			

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列している学校の割合は、前年度を上回っている。

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
18　児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立しているか 【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】	９９．０	＋４．１	＋０．８
79　学習指導と学習評価の計画の作成に当たっては、教職員同士が協力し合っているか。 【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】	９８．７	＋１．２	＋３．３
82　学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいるか。 【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】	９７．９	－０．６	－１．４

□　ほとんどの学校で、児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価しながら改善を図っている。

□　ほとんどの学校で、学習指導と学習評価の作成に当たって、教職員同士が協力し合っている。

□　ほとんどの学校で、学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいる。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問：なし】

②今後の対策・指導

◆　全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査結果を十分活用して、児童の学力や学習状況を把握・分析し、学校における教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる必要がある。

◆　全国学力・学習状況調査の公表する自校の内容や方法等については、教育上の効果や影響等を考慮して適切なものとなるよう判断する必要がある。

◆　小学校の新学習指導要領の趣旨を踏まえ、児童の資質・能力を育成するため、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図る必要がある。その際、各教科等の特質に応じて、具体的な学習内容、単元や題材などの構成、学習の場面等に応じた指導方法について研究を重ね、適切な指導方法を選択しながら工夫して実践していく必要がある。

◆　児童が主体的に課題を解決する手段のひとつとして、学校図書館等を計画的に活用する習慣を身に付けさせるようにする。例えば、公立図書館の配本サービス（レファレンスサービス）を活用して、学習する単元に関わる複数の書籍類をセットとして借り受け、児童の主体的な調べ学習に活用する。

（４）各教科の指導方法

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
39　算数の指導として、前年度までに、実生活における事象との関連を図った指導を行ったか。 【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	８４．８	＋６．８	＋１２．４

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　算数の指導として、実生活における事象との関連を図った指導を行った学校の割合は、全国を上回るとともに、前年度を大きく上回っている。

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	過年度との差
37　算数の指導として、前年度までに、補充的な学習の指導を行ったか。【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９７．６	＋３．３	＋３．３
40　算数の指導として、前年度までに、計算問題などの反復練習をする授業を行ったか【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９６．５	－０．２	－１．３
43　理科の指導として、前年度までに、補充的な学習の指導を行ったか。【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	７８．９	＋１２．４	＋１１．１
44　理科の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導を行ったか。【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	５６．０	－０．５	＋１３．９
45　理科の指導として、前年度までに、実生活における事象との関連を図った授業を行ったか【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	８７．９	＋２．２	＋５．３
46　理科の指導として、前年度までに、児童が科学的な体験や自然体験をする授業を行ったか。【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	８７．６	－０．５	＋６．７

※理科については平成２７年度の値との差である。

□　算数や理科の指導として、補充的な学習の指導や実生活における事象との関連を図った授業を行った学校の割合が過年度を上回っている。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
29　前年度に児童がコンピュータ等のＩＣＴを活用する学習活動を１クラス当たりどの程度行ったか。【「月1回以上」の合計】	７８．９	－６．８	（新規）

▼　児童がコンピュータ等のＩＣＴを活用する学習活動を行った学校の割合は、全国を下回っている。

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問：なし】

②今後の対策・指導

◆　児童の実態に応じ、効果的な場面において、コンピュータ等の情報通信技術等を活用する。

（５）個に応じた指導

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問：なし】

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
35　算数の授業において、前年度に、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を行い、習得できるようにしたか。【「行った」の合計】	５４．４	－７．６	＋０．４
36　算数の授業において、前年度に、習熟の早いグループに対して少人数による指導を行い、発展的な内容を扱ったか。【「行った」の合計】	４６．７	－８．０	＋３．２
52　特別支援教育について理解し、前年度までに、児童の特性に応じた指導上の工夫を行ったか。	９０．０	－４．４	＋５．２

【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】			

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

▼　特別支援教育についての理解のもと、児童の特性に応じた指導上の工夫（板書や説明の仕方、教材の工夫など）を行った学校の割合は、全国を下回っているが、前年度を上回っている。

▼　算数の授業において、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を行い、習得できるようにした学校の割合は、全国を大きく下回っている。

▼　算数の授業において、習熟の早いグループに対して少人数による指導を行い、発展的な内容を扱った学校の割合は、全国を大きく下回っている。

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
36　算数の授業において、前年度に、習熟の早いグループに対して少人数による指導を行い、発展的な内容を扱ったか。【「行った」の合計】	４６．７	－８．０	＋３．２

②今後の対策・指導

◆　全ての学級において発達障害を含む障害のある児童が在籍することを前提とした学級経営が求められる。特別な支援を要する児童の指導に当たっては、校内研修等で特別支援教育について全教職員が共通理解したり、個別の指導計画を作成したりして、適切な指導や支援を組織的・継続的に実施する。

◆　習熟度別学習や少人数学習、発展的な学習、補充的な学習などの学習を取り入れることにより、個に応じた指導を適切に実施する。

（６）家庭学習

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	過年度との差
69　前年度までに、理科の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えたか。【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	６３．３	＋１７．６	－０．９

※「過年度との差」とは、本県の今年度と２７年度の値の差

□　理科の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた学校の割合は、全国を極めて大きく上回っている。

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
63　前年度までに、保護者に対して、児童の家庭学習を促すような働きかけを行ったか。（国語／算数共通）【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９８．６	＋１．４	±０．０
64　前年度までに、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図ったか。【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９５．５	＋３．９	＋１．１
66　前年度までに、家庭学習の取組として、児童に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしたか。（国語／算数共通）【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９７．５	＋４．２	－１．１
67　前年度までに、算数の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えたか。【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	１００．０	＋０．５	±０．０
68　前年度までに、算数の指導として、児童に与えた家庭学習の課題について、評価・指導したか。【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	９８．６	＋１．０	－１．４

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　ほとんどの学校で、保護者に対して児童の家庭学習を促すような働きかけを行ってい

る。
□　ほとんどの学校で、児童に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えている。
□　すべての学校で、算数の指導として、家庭学習の課題（宿題）が与えられている。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	過年度との差
70　前年度までに、理科の指導として、長期休業期間中に自由研究や課題研究などの家庭学習の課題を与えたか。　【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	４７．０	－３９．０	＋５．２

▼　理科の指導として、長期休業期間中に自由研究や課題研究などの家庭学習の課題を与えた学校の割合は全国を極めて大きく下回っているものの、過年度を上回った。

②今後の対策・指導

◆　家庭学習は、学習したことを児童に定着させるためには欠かせないものであるため、引き続き、次のようなことを心がけるようにする。

家庭学習を充実させるために

○家庭学習の課題の与え方について、学校や児童の実態を考慮し、引き続き、学年ごとの基本的な学習時間、教科ごとの学習方法等について教職員間で共通理解を図る。
○学習内容の定着を図るためのドリルやプリント学習だけではなく、児童の自主的な学習を大事にした課題や、調べたり文章を書いたりする課題を定期的に出すなど、学習の内容や方法を具体的に指導する。
○引き続き、児童一人一人の家庭学習を積極的に評価し、見本となる児童の家庭学習の方法（ノート等）を紹介するなど、家庭学習の内容が充実するように支援する。
○家庭学習の習慣化を図るために、学校側から保護者に対して家庭学習に対する考え方を示したり、話し合う場を設けたりして、家庭と協力して取り組む。

（７）教員研修及び教職員の取組

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
76　個々の教員が、自らの専門性を高めていこうとしている教科・領域等を決めており、校外の教員同士の授業研究の場に定期的・継続的に参加しているか　【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】	９６．９	＋９．７	＋２．５

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　個々の教員が自らの専門性を高めていこうとしている教科・領域等を決め、校外の教員同士の授業研究の場に定期的・継続的に参加していると回答した学校の割合は、全国を大きく上回っている。

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
72　校長のリーダーシップのもと、研修リーダー等を校内に設け、校内研修の実施計画を整備するなど、組織的、継続的な研修を行っているか　【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】	１００．０	＋０．７	±０．０
75　教員が、他校や外部の研修機関などの学校外での研修に積極的に参加できるようにしているか　【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】	９９．６	＋２．２	－０．４
78　教職員は、校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させているか　【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】	９９．０	＋２．１	－０．６
79　学習指導と学習評価の計画の作成に当たって	９８．７	＋１．２	＋３．３

は、教職員同士が協力し合っているか 【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】			
83 学校として業務改善に取り組んでいるか 【「よくしている」「どちらかといえば、している」の合計】	９９．３	＋１．９	（新規）
84 校長は、校内の授業をどの程度見て回っているか 【「週に2日以上」の合計】	９５．８	＋０．７	－１．０

□　すべての学校で、校長のリーダーシップのもと、研修リーダー等を校内に設け、校内研修の実施計画を整備するなど、組織的、継続的な研修を行っている。
□　ほとんどの学校で、教職員が、他校や外部の研修機関などの学校外での研修や校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させている。
□　ほとんどの学校で、学習指導と学習評価の計画の作成に当たって、教職員同士が協力し合っている。
□　ほとんどの学校で、校長は、週に２回以上、校内の授業を見回っている。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問：なし】

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問：なし】

②今後の対策・指導

◆　校内研修の推進に当たっては、引き続き、次のようなことを心がける。

組織的な取組を推進するために

〇全国学力・学習状況調査結果を自校において分析し、その結果について学校全体で共有することが大切である。特に、課題解決の方策については全教員で検討し、調査実施学年以外の学年や調査実施教科以外の教科等の指導改善等を明確にする必要がある。
〇調査結果で明らかとなった成果と課題について、保護者参観日の全体会や学校通信等を通じて保護者や地域の人たちに対して公表や説明を行うとともに、学力向上のための取組について理解と協力を求める。
〇校内研修では、課題が見られた点を中心に、教職員の指導力の向上、指導内容や指導方法等の改善を図るため、模擬授業、事例研究、ＩＣＴの活用など実践に生かせる内容も適宜取り入れ、校内研修の充実に努める。

（８）学校種間の連携及び地域の人材・施設の活用

①概況及び課題

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上高かった質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
34 平成２９年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中学校と成果や課題を共有したか 【「よく行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	５３．０	－１０．３	＋９．２

※「前年度との差」とは、本県の今年度と前年度の値の差

□　近隣等の中学校と、全国学力・学習状況調査の分析結果についての成果や課題を共有した学校の割合は、全国を大きく下回っているものの、前年度を大きく上回っている。

【望ましい回答の割合が極めて高かった（概ね９５％程度）質問】　（単位：％）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
58 教育課程に位置づけられた自然の中での集団宿泊活動を行ったか。 【「行った」の合計】	９９．２	＋２．５	＋１．３
60 保護者や地域の人が学校の美化、登下校の見守り、学習・部活動支援、放課後支援、学校行事の運営などの活動に参加しているか 【「よく参加してくれる」「参加してくれる」の合計】	９７．３	－０．４	－０．６
62 保護者との郷土による取組は、学校の教育水準の向上に効果があったか 【「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」の合計】	９５．５	＋０．１	－１．６

□　ほとんどの学校で、自然の中での集団宿泊活動を行っている。
□　ほとんどの学校で、保護者や地域の人が学校の諸活動にボランティアとして参加している。
□　ほとんどの学校で、保護者や地域の人との協働による取組は、学校の教育水準の向上に効果があったと回答している。

【全国平均又は前年度県平均より５ポイント以上低かった質問】　（単位：%）

質問事項及び【回答】	青森県	全国との差	前年度との差
32　平成２９年度全国学力・学習状況調査の自校の結果について、保護者や地域の人たちに対して公表や説明を行ったか。　【「よく行った」「行った」の合計】	８３．１	－９．２	－３．２
53　前年度までに、地域の人材を外部講師として招聘した授業を行ったか。【「よく」行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	７１．７	－１１．７	－５．０
54　ボランティア等による授業サポート（補助）を行ったか。　【「よく」行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	３０．４	－１８．８	－０．７
55　博物館や科学館、図書館を利用した授業を行ったか。　【「よく」行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	３５．３	－１３．７	＋１．４
61　地域学校協働本部やコミュニティ・スクールなどの仕組みを生かして、保護者や地域の人との協働による活動を行ったか。【「よく」行った」「どちらかといえば、行った」の合計】	５９．２	－１３．６	（新規）

▼　平成２９年度全国学力・学習状況調査の自校の結果について、保護者や地域の人たちに対して公表や説明を行った学校の割合は全国を大きく下回るとともに、前年度も下回っている。
▼　地域の人材を外部講師として招聘した授業を行った学校の割合は、全国を大きく下回るとともに、前年度も下回っている。
▼　ボランティア等による授業サポートを行った学校の割合は、全国を大きく下回っている。
▼　博物館や科学館、図書館を利用した授業を行った学校の割合は、全国平均を大きく下回っている。
▼　地域学校協働本部やコミュニティ・スクールなどの仕組みを生かして、保護者や地域の人との協働による活動を行った学校の割合は全国を大きく下回っている。

【望ましい回答の割合が極めて低かった（概ね５０％未満）質問：なし】

②今後の対策・指導

◆　地域、学校、児童の実態を踏まえ、必要に応じて、地域の人材を授業に招聘したり、ボランティア等による授業サポートを取り入れたりするなど、地域人材の積極的な活用に努める。
◆　地域の実態を踏まえ、必要に応じて、社会教育施設等の積極的な活用に努める。
◆　今後も学校支援ボランティア活動を推進し、保護者や地域が連携して学校を支援する体制づくりに努める。
◆　近隣の中学校との連携については、教育活動の実施にとどまらず、児童生徒の学力に関する課題や互いの学校の取組等を共有するなどして、質的な充実をより一層図ることが必要である。
◆　小中連携に当たっては、引き続き、次のようなことを心がける。

小中連携の充実を図るために

○小・中教職員全体での合同研修会では、授業参観や協議を通して、相互の児童生徒の実態や相互の教育内容、指導方法、指導形態等、現状で行われている教育活動の具体的な取組などを共通理解し、各校の指導のねらい等に対する理解を共有する場にする。
○小中連携を推進する会議等では、各学校が自校の教育目標のもとに進めている教

育活動の中での連携の可能性を探ったり、児童生徒の学力に関する課題を共有したりすることで、自校の教育課程の編成に反映させるようにする。

○研修会や会議等で得た中学校での取組や生徒の現状に関する情報を全教職員で共有し、義務教育９年間を通じて子どもを育てるという意識の下、小学校卒業時までに児童にどのような力を身に付けさせるかという視点も含めて、教育課程の編成に当たるようにする。